



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	手続き的意味による日本語談話標識「なんか」の分析
Author(s)	楊, 雯淇
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 24, 57-74
Issue Date	2017-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64762
Type	departmental bulletin paper
File Information	57.pdf



手続き的意味による 日本語談話標識 「なんか」の分析

楊 雯淇

楊

雯淇

YANG Wenqi

An analysis of the Japanese Discourse Marker *Nanka* by procedural meaning

YANG Wenqi

abstract

The purpose of the present study is to analyze the Japanese discourse marker *nanka* by “procedural meaning” and to show that the properties of *nanka* discussed in the previous literature can be naturally accounted for in this approach.

I will firstly outline the Relevance Theory background and introduce some important concepts. Secondly, I will review the previous studies of *nanka* and discuss their problems. Then, I propose an analysis of *nanka* using “procedural meaning”, which helps the hearer notice that the speaker has uncertainty about his utterance at some level and form a relevant higher-level explicature with less effort. I also argue that functions of *nanka*, such as alleviation of the speaker's commitment to the truth of an utterance, euphemism, filler, and facilitation of turn taking, are derived from the procedural meaning of *nanka* by inference.

1 はじめに

談話標識 (discourse marker) の研究は、1980年代から英語の談話分析の研究の発展とともに形成され始め、現在盛んになりつつある研究分野である¹。その研究の方法として、談話分析的アプローチの他に、Blakemore (1987) によって提案された関連性理論的アプローチが挙げられる。Blakemore (1987) は、関連性理論の枠組みで、語が表す意味には、概念的意味 (conceptual meaning) と手続き的意味 (procedural meaning) があることを仮定し、談話標識は一般的に手続き的意味を持ち、その手続き的意味が聞き手の推論に制約を課し、発話解釈を方向付けるという分析を提案した。本稿では、関連性理論的アプローチを用いて、このアプローチではこれまで分析されていなかった日本語談話標識「なんか」の意味・機能を分析することを試みる²。

日本語の日常会話には、談話標識として機能する「なんか」が頻繁に使用される (内田2001、林2006、飯尾2006)。「なんか」は、談話における新しい話題の開始、会話の推進、間のつなぎなどの談話的機能や、話し手の責任の軽減や聞き手の不快感の軽減などの対人的機能を持つと主張されている。しかし、談話標識の「なんか」は聞き手の発話解釈の過程における役割が十分に検討されていない。

本稿では、聞き手の発話解釈の観点からの分析を提案する。すなわち、「なんか」は、話し手には発話のどこかのレベルに不確定性があることを示す高次表意を構築するように聞き手の推論に制約を課す手続き的意味を持つという分析を提案する。また、先行研究で記述された「なんか」の各種の機能は、この手続き的意味から聞き手の推論を経て得られる派生的機能であることを示す。

本稿の構成は次の通りである。第2節では、関連性理論の概要とともに、手続き的意味、高次表意などの重要ないくつかの概念を説明する。第3節では、日本語の「なんか」に焦点を当て、その先行研究と残されている課題を整理する。第4節は、手続き的意味による分析を提案し、「なんか」の意味・機能を統一的に説明することを試みる。最後に、第5節では結論と今後の課題について述べる。

▶1. 「談話標識」は、研究の目的や方法の違いによって、「談話連結語 (Discourse Connective)」や「談話操作語 (Discourse Operator)」、「語用論標識 (Pragmatic Marker)」など、様々な名称で呼ばれている。

▶2. 「なんか」を談話標識として扱う研究として内田 (2001)、林 (2006) などが挙げられる。さらに、「なんか」を談話標識として考える証拠として少なくとも次の3つ特徴を挙げることができる。①音韻的に、「ポーズを伴うことが多く、独立した音調群を形成することができる」。②統語的に、「文頭に現れることが多く、文にゆるやかに付加されている」。③意味的に、「文の真偽値に関わる意味を持たない」。談話標識の特徴については、松尾他 (2015: 334-335) を参照。

2 理論的枠組み

2.1 関連性理論

Sperber & Wilson (1986, 1995) が提唱した関連性理論は、人間の認知は関連性の最大化と連動するように働く傾向があるという前提に立っている。

- ▶3. 認知効果の典型的なタイプに関しては、Sperber & Wilson 1995: 109、Wilson & Sperber 2004: 608を参照されたい。なお、談話標識「なんか」の関連性への貢献は処理労力を減らすことにある。
- ▶4. 詳しくは、東森・吉村2003: 20-22、Wilson & Sperber 2004: 613を参照されたい。

この枠組みでは、発話の言語的意味は、話し手の意図した解釈を得るための手掛かりであり、聞き手はその手掛かりをもとに、推論を用いて発話の解釈を構築し、自身の認知環境を改善できるような認知効果を引き出すと考えられている。また、引き出された認知効果とそれを引き出すための処理労力によって発話された情報の関連性の度合いが決まり、同じ条件のもとで、認知効果が大きいほど関連性が高く、処理労力が大きいほど関連性が低くなるのである³。人間は最も小さい処理労力で最も大きい認知効果を得ることを求める傾向があるため、聞き手は処理労力が最小の手順を用いて、発話の解釈を構築しながら、その関連性を検証する。解釈が処理労力に見合うだけの関連性があれば、それを話し手が意図した解釈として受容する。もしそうでなければ、次に入手可能な解釈を構築するとともに検証を行い、解釈が受容可能になるまでこの作業を繰り返すのである⁴。

2.2 手続き的意味

この関連性理論の枠組みで、Blakemore (1987) は、語がコード化する意味は、計算の対象になる命題的表示の構成要素に関わる概念的意味と、計算自体、すなわち心的過程に関わる手続き的意味に分けられると主張した。さらに、談話標識の意味は、聞き手の発話解釈における推論の側面に何らかの制約を課す「手続き的意味」であり、その制約は一般に聞き手の処理労力を減らして、関連性を高めることに貢献するものだと言っている。(1) の例を見てみよう。

(1) a. Tom can open Bill's safe. b. He knows the combination.

(a. TomはBillの金庫を開けられる。b. 彼(Tom)は番号を知っている。)

(Blakemore 1987、2000)

(1) の後半の発話b. には少なくとも2つの解釈がある。(1b) の発話の表す命題を事実として事前に知らなかった場合は、「Tomは番号を知っている」という命題は「TomはBillの金庫を開けられる」という命題の結論であるという解釈が聞き手にとって、新しい文脈含意が得られ、関連性がある解釈である。一方、(1b) の発話の表す命題がすでに周知の事実であるような状況であれば、上述の解釈が関連性を持たず、逆に、「Tomは番号を知っている」という命題は「TomはBillの金庫を開けられる」という命題の前提であるという解釈が、聞き手の持っている想定を強める効果を持ち、関連性がある解釈である。このように、(1b) の発話の解釈には、少なくとも2つの候補があり、1つずつ検証する必要がある場合には、そのどちらかを推論する過程でそのための処理労力がかかる。

しかし、(2) と (3) に見られるようにsoやafter allのような談話標識を入れると、後続する発話の解釈が前行する発話の結論と前提のどちらか1つに制限されるようになる。

- (2) a. Tom can open Bill's safe. b. So he knows the combination.
 (3) a. Tom can open Bill's safe. b. After all he knows the combination.

(2b) では、soは、後続する発話が表す命題を先行する命題の結論（文脈含意）として解釈するように聞き手の推論に制約を課し、「それでは番号を知っているのだ」という解釈が素早く得られる。それに対して、(3b) のafter allは、後続する発話が表す命題を先行する命題の前提として解釈するように聞き手の推論に制約を課し、「だって、番号を知っているんだから」という解釈が構築されることになる⁵。

2.3 表意

Blakemore (1987) によって提案された当初は、手続き的意味は、発話の推意 (implicature) の制約に貢献するものと考えられたが、その後手続き的意味が制約する対象は以下で説明する表意 (explicature) にまで一般化された。

関連性理論では、発話によって伝達される想定として、表意と推意がある。表意は、さらに基礎表意 (basic-level explicature) と高次表意 (higher-level explicature) に分かれている。基礎表意は「発話によってコード化されているところからそれを基盤としてさらに推論によって得られる明示的な想定」であり (内田2013: 42)、高次表意は、「具体的に言語化されている発話に設定される上位節をいい、発話行為、命題態度などを反映する」ものである (内田2013: 51)。例 (4)–(6) を見てみよう。

- (4) Peter: Will you pay back the money by Tuesday?
 Mary: I will pay it back by then.
 (5) Mary will pay back the money by Tuesday.
 (6) a. Mary is promising to pay back the money by Tuesday.
 b. Mary believes she will pay back the money by Tuesday.
 ...

(Wilson & Sperber 2004)

まず、例文 (4) のMaryの発話の代名詞や指示詞などを具体的な指示を示す名詞で置き換えることで得られた、(5) Mary will pay back the money by TuesdayはMaryの発話によって伝達された基礎表意である。その一方で、(6a, b) に見られるように、「約束している」または「信じている」のような発話行為や信念などを反映する想定も構築され、伝達される。すなわち、(6a) Mary is promising to pay back the money by Tuesday及び (6b) Mary believes she will pay back the money by Tuesdayは伝達された高次表意である。

日本語の例も見よう。西山 (1995: 32, 34, 35) は下のような山田太郎と東京の友人の発話の例を挙げている⁶。

►5. 詳しくは、Blakemore (1996: 332-333)、内田 (2011: 97-98) を参照されたい。

►6. 西山 (1995) では、例文は会話形式の例文としてまとめて示されていない。そこで、本稿では西山 (1995) のこれらの例文を (7)-(9) としてまとめて示した。

- (7) 友人：昨日の地震で、君のところは大丈夫だったか？
山田太郎：わたくしの会社が昨日つぶれた。
- (8) 山田太郎の勤務している会社が一九九五年一月一七日、午前六時前、倒壊した。
- (9) a. 山田太郎は、(8) の事実を告げている。
b. 山田太郎は、(8) が真であると心から信じている。
c. 山田太郎は、(8) の事実をひどく悲しみ、落胆している。

東京の友人による質問にたいして、山田太郎が応答した例 (7) について、山田太郎の発話に対して東京の友人は (8) の基礎表意を把握することに留まらない。西山 (1995: 35) は、「例えば、山田太郎が声をふるわせながら、泣き声で答えた場合、東京の友人は、山田太郎の発話の解釈として、(8) ばかりではなく、(8) を一部に埋め込んだ次のような命題 (9a-c) のような解釈をするのが自然である」と説明している。さらに、西山 (1995: 36) は、「(9a) は、いわゆる発話の力についての言明であり、(9b) (9c) は表出命題にたいする話し手の心的態度を表している。(中略) 聞き手である東京の友人は、山田太郎の声の調子や言語外の多様なコンテキスト情報、さらに論理的推論を駆使してこれらの高次表意を復元するわけである」と述べている⁷⁾。

英語の例でも日本語の例でも見られたように、一つの発話は複数の表意を持つことができ、その構築に推論が関わっているため、手続き的意味は表意の構築にも制約をかけることができる。本稿では、「なんか」は、手続き的意味を持ち、話し手には発話が伝達されるまでのどこかのレベルに不確実性があるという心的態度を反映する高次表意を構築することに貢献しているという分析を提案する。具体的な提案と分析を示す前に、「なんか」の先行研究について概観する。

▶ 7. 西山 (1995) による直接引用の部分は、例文番号を本稿に合わせて修正した。

3 「なんか」の先行研究

従来の研究には、不定表現としての「なんか」の用法を、文法レベルで考察した研究と談話標識としての機能を記述した談話分析的研究がある。本節は、この「なんか」の二つの側面の先行研究を紹介した上で、残っている問題点を示す。

3.1 「なんか」の文法レベルの研究

不定表現としての「なんか」の研究としては、まず森川 (1991) が挙げられる。森川 (1991) によると、「なんか」には、不定の対象を、もの・こととする系列と、認知レベルと言語表現レベルとする系列の2つがある。森川 (1991) を踏まえて、川上 (1991) は、「なんか」の不定対象についての分析をより精緻化した。川上 (1991: 109) は、こと (事態) の認知と言語表現

において不定があるという可能性の他に、話し手がその事態をどのように意味づけ、受け入れるかという、話し手と事態との「関係付けレベル」に不定があるという可能性があることを指摘した。この考察に基づいて、川上は、森川の「認知レベルと言語表現レベル」という2つ目の系列に新たに「関係付けレベル」での不定という類を加えた。川上の分類では、このように、「なんか」の不定対象は、次のようにⅠ「もの」やⅡ「こと」という系列に加えて、A「認知レベル」、B「言語表現化レベル」、C「関係付けレベル」という3つのレベルの系列とも関わると考えられる。

- ⅠA 「もの」が充分把握できない。
 - ⅠB 把握した「もの」に対応する適切な言語表現化ができない。
 - ⅡA 「こと」(事態)が充分把握できない。
 - ⅡB 把握した「こと」(事態)に対応する適切な言語表現化ができない。
 - ⅡC 事態の背後にある意味・理由・意図などが分からない。
または、言語表現化はしたものの、事態の存在が受け入れ難い。
- (川上1991: 119)

川上は、上記の5つの類に対応する不定の例として(10)–(14)を示している。

- (10) だれかが何かおいしいものを持ってきてくれました。
- (11) 心の中を何かしきりと突くものがあつた。
- (12) ジョパンニは、なにかたいへんさびしいようなかなしいような気がして、
- (13) ちがうよ。なんか今日は寝つかれなくてさ。
- (14) 何か指先が³白い⁸。

(川上1991: 103, 108)

これに加え、川上(1991)は「なんか」と共起する文形式についても論じている。「存在文」「状態性述語文」「動作性述語文」の3種類の文との共起を観察し、「なんか」はさまざまな文環境と共起しうることを報告している。それと同時に、①「使役・命令・禁止」の表現(例15-17)、②感嘆文(例18)、③真理・定義・常識・習性などの表現(例19-22)、とは共起しにくいことを指摘した。

- (15) ?子供を何か泳が³せた。
- (16) ?何かすわれ!
- (17) ?何かテレビをつけるな!
- (18) ?何か、ねずみ!(急激な心の動きを表す)
- (19) ?何か地球は太陽の周りを回っている。
- (20) ?何かグッピーは胎生メダカである。
- (21) ?何かオリンピックは四年ごとに開かれる。
- (22) ?何かきれいな花にはとげがある。

(川上1991: 110-111)

▶ 8. 川上(1991: 108)によると、各レベルの不定を示す例は絶対的なものではない。例えば、(10)は、「血色の悪さ」を表しているのに適当な表現が見つからず、とりあえず「白い」と言語化した場合は、ⅡBに対応する。しかし、「白い」ということが「何を意味しているのか分からない」という場合や、「どう考えても白いはずがない」というように受け入れ難い場合などは、ⅡCに対応する。

上述のように、川上（1991）では「なんか」の不定の対象及び「なんか」と共起する文形式が分類整理されている。特に、川上（1991）によって精緻化された「なんか」が不定の対象とするレベルは、人間の言語表現化の過程における異なる心的状態の存在を示唆し、本研究の手続きの意味を用いた分析の基礎となる観察を示している。しかし、これらの分析は「なんか」が出現する文のレベルを指摘するのに留まっている。さらに、実際のコミュニケーションにおいて、「なんか」の不定の対象のレベルは上述の3つに限らないという問題もある。この点については、第4節で詳しく説明する。

3.2 「なんか」の談話レベルの研究

文法レベルの研究と平行して、「なんか」の談話における機能に焦点を当てた談話分析的研究も行われた。次に「なんか」の談話分析的研究を見てみよう。

まず、川上（1992）は、川上（1991）に基づいて、小説の具体的な談話資料を通して「認知」「言語表現」「関係付け」という3つの不定のレベルを検証するとともに、「なんか」の使用には「婉曲」「責任回避」「注意喚起」「雰囲気共有」「間つなぎ」などの表現効果があると述べている。

鈴木（2000）は、自然会話に現れた「なんか」の意味・機能を、意味論的機能、語用論的機能、談話調節的機能の3つに分類した。この中の語用論的機能と談話調節的機能は本稿で談話標識としての機能と呼ぶものに対応すると考えられる。鈴木（2000：66）は、語用論的機能を「発話者の意図、発話者と発話内容の関わり方など、言語外の要素を反映し、メタメッセージを伝える語の働き」と定義している。特に、「伝聞表現」や「婉曲表現」や「過去表現」と呼応・共起する「なんか」と、「相手と食い違う意見」や「否定的な内容の意見」を暗示する「なんか」が多く観察された。例えば、(23)は伝聞表現と共起する例であり、(24)は否定的な内容の意見を暗示する例である⁹。

►9. 鈴木（2000）から引用された(23)-(26)の例に用いられている記号とその意味は次の通りである。「行頭のアルファベット」は「発話者（仮名）の頭文字」、「-」は「のばした音」、「{ }」は「非言語行動」、「→」は「議論の中心となっている発話・行動に注意を促す」を示している（鈴木2000：65）。

(23) →296D：出なくていい、なんか授業が少ないって聞いたんだけど、

(24) 290G：やりたくなかったっていうかな、

291：今後悔してるんや、やったことを。

292Z：ほんま？

→293G：いや高3でなんかなー。

→294Z：あ高3厳しいわ。

→295G：高3もうわすれ、勉強できへんねやんかも今俺。

（鈴木2000：68，73）

また、鈴木（2000：66）は、談話調節機能を「コミュニケーションを円滑に進めるための語の働き」と定義している。言いたいことが頭に浮かんでいながらもかかわらず適切なことばがすぐに出てこない時などに見られるつなぎの言葉としての機能であると鈴木は述べている。

(25) →564N:「うん、んで、なんかちょっと、昔の、昭和初期ぐらいのこと？」

(26) 239T:うんうんそっかー

240J:へー

241T:んー? そっかー

→242J:なんか、音楽学ってすごい、ねえ。{笑:あへん}

(鈴木2000:75-76)

川上(1992)や鈴木(2000)によって「なんか」の談話における機能の分類が提案された他、平本(2011)、森(2012)は談話分析的アプローチを用いて、「なんか」の談話構造的機能を観察した。

平本(2011)は「話者性」の「強度」「重複への耐性」という観点から「なんか」を観察した。平本(2011)は近畿地方の私立大学学部生(一部は大学教員)の自由対話(2-6人までの対話状況を含む、約421分)をデータとして使用し、「なんか」とそれ以外のターン開始要素が同時に開始する場合には、発話が「継続」していたか「脱落」していたかを観察した。その結果、特に、話題の境界後の重複や確認要求の後の重複で、「なんか」に続く発話が脱落しやすい傾向にあることが確認されている。例えば(27)では、0.7秒の沈黙後、Bによる「なんか」とAの発話が同時に始まり、Bの発話から「なんか」に続く発話が脱落したことが観察されている¹⁰。平本によると、「なんか」は「弱い」話者性を提示し、ターンを譲ることで他者との重複を解決する手段になり、「重複解消装置」の一つになっていると主張した。

(27) A:°めっちゃうまい°(.)うん

(0.7)

B:[なんか

A:[それ友達にめっちゃうけてん

B:ほ: :

(.)

A:そう(0.2)夜に(0.2)出したやつが

(平本2011:203)

また、森(2012)は同じく自然に生じた会話を録音したデータを使用し、会話のトピックの推移が行われた部分の「なんか」を観察した。その結果、トピックが完結可能な場所や沈黙の後に「なんか」が現れて、新しいトピックがあることを示唆し、新しい連鎖が開始することが明らかにされた。例えば(28)では、森(2012)によれば、「なんか」はトピックが完結可能である場所に出現し、トピックの推移をマークしている。

▶10. 平本(2011)から引用された(27)の例に用いられている記号とその意味は次の通りである。「°文字°」は「弱い音調で発されている発話」、「(数字)」は「コンマ1秒単位での沈黙の長さ」、「(.)」は「短い沈黙」、「[]」は「重複の始まりと終わり」、「:」は「直前の音の引き延ばし(個数により相対的長さを表す)」、「> <」は「加速」、「< >」は「減速」を意味する。後述の森川(2012)の(28)の例も同じである。

(28) A: あ 正倉院まだ貼ってる ((正倉院のチラシを見ている))

B: 貼ってる も [う終わってるし]

A: [もう終わった] よ

B: >もう12月だしね<

A: ね: : <°早いな: °>

B: °うん°

A: ((Bに向き直って)) なんかさ: ホテルのバイトさ:

B: [うん]

(森2012: 32-33)

上述のように、これらの研究では、「なんか」の談話における機能が整理され分類されていた。川上(1992)、鈴木(2001)は「なんか」の機能の分類を行い、平本(2011)、森(2012)はそれと異なり、談話がどのように組み立てられているのかを示唆する「なんか」の談話構成的機能を示した。

3.3 先行研究の問題点

前節で概観した先行研究は、「なんか」の豊富なデータを提供するとともに、文法レベルと談話レベルの2つの側面から、「なんか」の不定対象、文形式の制限、談話に働く機能などについての記述的な分類を行った。

しかしながら、次のような2つの問題点が残されている。まず概念的問題として先行研究は聞き手の発話解釈の観点から、「なんか」の意味・機能について十分に検討されていない。特に、分類学的研究や談話分析的研究から、様々な機能が観察され、分類されてはいるが、「なんか」の使用がどのようなメカニズムで聞き手の解釈を助け、各種の機能を成り立たせているかが十分に説明されていない。次に、経験的問題として、3つの不定のレベル以外に、伝達という行為自体に不定があることも考えられる。以下では、手続きの意味を用いた「なんか」の分析を提案し、これらの問題を解決することを試みる。

▶11. 本稿は、不確定性があるのは必ずしも1つのレベルに限るわけではなく、その判断は部分的に文脈に依存すると考える。すなわち、「なんか」の制約は、soやafter allのように、一つの特定の認知効果を導きだせるように聞き手の推論を制限するわけではなく、比較的に緩い制約で、ある範囲で聞き手の解釈の範囲を狭める働きをしている。これに関連して、Wharton (2003, 2009) は、手続きの意味を用いて間投詞を分析し、「制約」の代わりに「活性化(activation)」という概念を用いて手続きの意味を特徴づけている。本稿では「制約」の観点を取っているが、「活性化」の観点から本提案を発展させる可能性については今後の課題とする。

4 | 手続きの意味による分析

4.1 「なんか」の手続きの意味

本研究では、談話標識の「なんか」は聞き手が高次表意を構築する推論に制約を課す(29)のような手続きの意味を持つという分析を提案する。

(29) 話し手には発話が伝達される過程のどこかのレベルに不確定性があると解釈せよ¹¹。

「どこかのレベル」は、川上(1991)によって整理された3つの不定のレベルに、さらに新たに「伝達レベル」を加える。つまり、発話が表す命題自体

に関わる「認知レベル」、「関係付けレベル」、及び、命題が伝達される過程に関わる「言語表現化レベル」と「伝達レベル」の4つを仮定する¹²。なお、具体的にどのレベルに不確定性があるかは文脈によって決まる。以下では、「なんか」が使用されている場合と使用されていない場合を比較分析し、「なんか」の使用は、話し手の命題態度を明示的に示しており、聞き手が不必要な処理労力を使わずにより正しい解釈を得られるようになるため、その分だけ関連性を高めることに貢献していることを示す。まず、(30)を見てみよう。

(30) A: でも、いい人なんでしょう、その人。

B: あ、柿崎先輩? うん、なんか、いい人そうだったなあ¹³。

この例において、「なんか」の使用は、話し手であるBに発話が伝達される過程のどこかのレベルに不確定性があるという高次表意を構築するように聞き手であるAの推論を制約する。特に、Bは過去のことを思い出しながら発話しているという文脈のなかで、Bの記憶が十分はっきりしているわけではなく、命題自体にたいして認知レベルに不確定性があると解釈されやすい。もし(31)が示しているように、「なんか」がなかったら、上述の解釈と違った別な解釈が聞き手によって構築されるかもしれない。

(31) A: でも、いい人なんでしょう、その人。

B: あ、柿崎先輩? うん、いい人そうだったなあ。

(32) a. Bは柿崎先輩はいい人そうだったと信じている。

b. Bは柿崎先輩はいい人そうだったと説得している。

c. Bは柿崎先輩はいい人そうだったとアピールしている。

d. Bは柿崎先輩はいい人そうだったことを懐かしがっている。

e. Bは柿崎先輩はいい人そうだったことに（認知レベルに）不確定性がある。

...

(31) Bの発話に対して、(32a-d)で示したような心的態度や発話行為を表す高次表意の候補が考えられる。例えば、Bは柿崎先輩がいい人そうだったと信じているという高次表意が構築できる。または、BはAが確認を求めたのに対して、Aの疑いを解消し、柿崎先輩がいい人そうだったと説得しているという高次表意の解釈を行うこともできる。さらに、B自身は柿崎さんに好意を持ち、柿崎のことをアピールしているか或は懐かしがっているという解釈も可能である。

しかし「なんか」が加わることで、以上で考えられた(32a-d)の解釈の可能性は低くなり、代わりに、(32e)に示したように、聞き手であるAは、話し手であるBが当該事態に関して（認知レベルに）不確定性があるということを示す高次表意が構築されるように制約される。すなわち、話し手は柿崎先輩のことをよく知っているか、または、はっきり覚えているわけではなく、不確定性を持ったままの発話だと聞き手は解釈するのである。もちろん、「なん

▶12. 川上(1991)に従い「認知レベル」の用語を援用しているが、「認知」という用語は、ここでは、話し手の物事についての「認識」という意味で用いている。したがって、人間(聞き手)の発話の認知処理に関わる理論である関連性理論が使用しているより広い意味での「認知」とは異なる意味で用いている。

▶13. 2004年放送したドラマ『オレンジデイズ』(第7話)を出典とするデータである。

か」がなくても、同様な解釈ができないわけではないが、その解釈に辿り着くまでには、より多くの処理労力が必要とされる。しかし、「なんか」があることで、話し手の意図した高次表意をよりはやく正しく構築できるようになり、関連性に貢献していると考えられる。

次に関係付けレベルに不定があることを示していると考えられる「なんか」の例を見てみよう。

(33) (課長と一緒に会議室に入って)

課長：なんか、この部屋いつも寒いね。

この例において、「なんか」があるので、課長は「この部屋がいつも寒いね」という発話が伝達される過程のどこかのレベルに不確定性があるということを示す高次表意が構築されるように聞き手は制約される。特に、この文脈において、関係付けレベルに不確定性があるという解釈が構築されやすい。なぜなら、部屋がいつも寒いことがはっきり知覚できることであるため、命題そのものではなく、その背後の理由、つまり、なぜいつもこの部屋が寒いかがよく分からず、関係付けレベルに不確定性があると解釈されやすい。もし、(34) に示したように、「なんか」がなかったら、聞き手は別な方向に解釈をするかもしれない。

(34) (課長と一緒に会議室に入って)

課長：この部屋いつも寒いね。

(35) a. 課長はこの部屋がいつも寒いと告げている。

b. 課長はこの部屋がいつも寒いと信じている。

c. 課長はこの部屋がいつも寒いということに不満を持っている。

d. 課長はこの部屋がいつも寒いことを怒っている。

e. 課長はこの部屋がいつも寒いことを聞き手に注意している。

f. 課長はこの部屋がいつも寒いことに（関係付けレベルに）不確定性がある。

...

(34) の課長の発話は、この部屋がいつも寒いという命題内容の上位に、(35a-e) で示したように、言い切っているような告知や信念、あるいは不満、怒り、さらに聞き手への注意など複数の高次表意の候補が考えられる。しかし、「なんか」が加わると、聞き手が、課長の発話には（関係付けレベルに）不確定性を含む発話ということを示す高次表意を構築するように推論が制約される。「なんか」がなくても、同じ解釈が行われる可能性もあるが、聞き手は話し手の不定に気づきにくく、より多くの処理労力が必要とされ、したがってその分だけ関連性が低くなると考えられる。

次に、「なんか」が言語表現化レベルに不定があることを示す例 (36) を見てみよう。

(36) (海外での生活経験に関する会話場面で)

なんか、安定感がほしかった。

(36) において、「なんか」があることで、話し手には「安定感がほしかった」という発話が伝達される過程のどこかのレベルに不確定性があることを示す高次表意を構築するように聞き手の推論が制約される。特に、この文脈において、話し手は自分の心境とその背後の理由がよく分かるため、認知レベルや関係付けレベルに不定があるより、正確な言葉が見つからず、命題を言語表現化するレベルに不定があると解釈されやすい。もし (37) に示しているように、「なんか」がないと、聞き手は別の方向に高次表意を構築するかもしれない。

(37) (海外での生活経験に関する会話場面で)

安定感がほしかった。

(38) a. 話し手は安定感がほしかったと言い切っている。

b. 話し手は安定感がほしかったと信じている。

c. 話し手は安定感がほしかったことを悲しがっている。

d. 話し手は安定感がほしかったということに（言語表現化レベルに）不確定性がある。

...

(37) の発話に対して、(38a-c) に示したように、安定感がほしかったという命題の上位に、話し手の断言や信念、あるいは悲しみなどの発話行為や命題態度を反映した高次表意を構築できる。しかし、「なんか」があると、話し手は (38a-c) よりも、(38d) が示しているような、「安定感」という言語表現の選択（言語表現化レベル）に不確定性があることを示す高次表意が構築されやすくなる。

最後に、上述した「認知レベル」「関係付けレベル」「言語表現化レベル」のどれにおいても不確定性がない場合にも「なんか」が使用されることもある。

(39) の例を見てみよう。

(39) なんか、雨がよいよ大きくなってきたよ。

(39) の発話がされる際、話し手がはっきり目と耳で雨が大きくなってきたことを感知できている。また、天気が変わりやすい時期であるため、雨が激しくなっても不思議がない、さらに、言語表現化には特に難しさがない場合である。このような場合には、命題を伝達すること自体に不確定性があることが考えられる。そこで、本稿では不確定性が生じるレベルとして新たに「伝達レベル」を加える¹⁴。この場合では、「なんか」の使用によって、話し手は「雨がよいよ大きくなった」という命題に関わる伝達レベルに不確定性があることを示す高次表意が構築されるように聞き手の推論が制約される。もし「なんか」がなかったら、上述の解釈と違った別な解釈が構築されるかもしれない。

▶ 14. 川上 (1991) では「談話レベルでは聞き手への配慮や内容への配慮などから、さらに様々なレベルでの不定が存在しうることが予想される」ことに言及し、川上 (1992) では、談話レベルにおける「なんか」の表現効果の考察を加えたが、不定のレベルは加えておらず、伝達レベルに不定があることを指摘していない。

(40) 雨がよいよいよ大きくなってきたよ。

(41) a. 話し手は雨がよいよいよ大きくなってきたと告げている。

b. 話し手は雨がよいよいよ大きくなってきたと感嘆している。

c. 話し手は雨がよいよいよ大きくなってきたと警告している。

d. 話し手は雨がよいよいよ大きくなってきたことに（伝達レベルに）不確定性がある。

...

(40) の発話において、(41a-c) で示したような告知や感嘆、警告などの高次表意が構築される可能性がある。一方、(39) のように「なんか」があることで、伝達レベルに不確定性があるという解釈が得られやすくなる。この発話がなされるのは、例えば、大雨になったら、聞き手が念願の遠足を中止せざるをえないというような状況などである。話し手はこの情報を伝えることの影響を考え、情報を伝達すべきかどうかがよく分からないという態度を明示的に表している。こうすることによって聞き手は、より少ない処理労力で話し手が意図した解釈に近づくことができると考えられる。

4.2 「なんか」が使用できない場面とその理由

上述のような、「なんか」は聞き手の発話解釈における高次表意の構築に制約を課しているという手続き的分析は、ある発話行為を表す文になぜ「なんか」が出現できないのかも説明できる。例えば、川上（1991:110）は、「使役・命令・禁止」などの表現とは共起しにくいことを指摘し、(42) (43) のような「なんか」の使用が不自然であることを示した。（＝（16）-（17））

(42) ?何かすわれ！

(43) ?何かテレビを付けるな！

川上（1991:110）はこのような「なんか」の共起制限に対して、「強い意志を表すような作用的な意味の面には共起しない」と説明を試みているが、記述的な説明に留まっている。本稿の提案では認知的な観点から原理的な説明を行うことができる。つまり、(42) (43) は、文形式により、聞き手は発話解釈する際に、話し手は座るように命令している、テレビを付けることを禁じるという発話行為を含む高次表意を構築する。一般的に、命令を下したり行為を禁じたりすることを表す発話は不確定性を含まない行動の指示である。もし「なんか」を使用すると、同時に話し手にはどこかのレベルに不確定性があるという心的態度を含む高次表意が構築され、命令や禁止を含む高次表意とは両立しない推論を行うように聞き手は制約されることになる。このように、高次表意の構築に矛盾が生じて、聞き手は順調に高次表意を構築することができない。即ち、余分な処理労力をかけているにも関わらず認知環境の改善ができず、人間の認知原理と伝達原理に違反しているため、(42) (43) は求められている自然な発話にならないと説明できる。

また、川上（1991:111）では、真理・定義・常識・習性など「なんか」

の出現できない例が挙げられていた。しかし、なぜ不自然なのかは説明されていなかった。これらの例を繰り返して見てみよう。(= (19)-(22))

- (44) ?何か地球は太陽の周りを回っている。
- (45) ?何かグッピーは胎生メダカである。
- (46) ?何かオリンピックは四年ごとに開かれる。
- (47) ?何かきれいな花にはとげがある。

本稿の分析によると、真理・定義などのような発話は、一般的に確定したことの伝達であり、常識・習性などのような発話も、一般的に誰にでもよく知られているはずであるため、話し手が異議なく信じているという高次表意が構築される傾向がある。しかし、それらの発話に「なんか」を加えると、聞き手は、話し手が（認知レベルに）不確定性があることに気付き、「信じている」という高次表意の構築が難しくなるのである。このため、聞き手は認知効果が得られるまで発話解釈を順調に進めることができず、発話が不自然になるのである。

4.1と4.2は、「なんか」の手続きの意味の分析を提案した。さらに、この手続きの意味を用いて、「なんか」がなぜある発話では使用できないかを説明した。次に4.3では、従来の「なんか」の分類学的研究や談話分析の研究で別々に記述されていた意味・機能を統一的に関連づけて説明することを可能にすることを示す。

4.3 手続きの意味と派生的機能

第3節では、談話標識の「なんか」は、話し手の責任軽減、間のつなぎ、重複の解消、新しい話題の導入、聞き手配慮、婉曲表現などの機能を持つという先行研究の知見を概観した。以下では、これらの機能は高次表意を制約する手続きの意味から派生的に得られるものだということを主張する。まず、(48)の例を見てみよう(= (30))。

- (48) A: いい人でしょう、その人。
- B: 柿崎先輩? うん、なんか、いい人そうだったなあ。

(48)では、「なんか」は実際の会話の場面において、話し手Bの責任を軽減する機能を持っていると考えられる。この機能は、「なんか」の手続きの意味によって構築された高次表意から次のように派生された機能だと考えられる。つまり、「なんか」があることによって、話し手は発話が表す命題にたいして認知レベルに不確定性があるという命題態度が反映され、伝達された情報は正しいとは限らないというニュアンスが伝わる。聞き手はこの意図された高次表意を構築した上で、どれくらい情報を受け入れるかは責任を持って決め、その分だけ話し手の責任が軽減される。

次に(49)の例を見てみよう(= (36))。

(49) (海外での生活経験に関する会話場面で)

なんか、安定感がほしかった。

(49) では、「なんか」は、話し手がすぐに答えを出せず、間をつなぐ機能を果たしていると考えられる。この例では、話し手は（言語表現化レベルに）不確定性があることを聞き手が解釈し、不定のある発話という方向に高次表意を構築できる。そのため、話し手と一緒に言葉を考えたり、話し手の探索をもう少し待ち、より正確な言葉あるいは補足の説明を期待したりすることが考えられる。そこで、「なんか」は、聞き手が反応する前の間をつなぐ表現として機能するのである。

次に、(50) を見てみよう (= (27))。

(50) A: °めっちゃうまい° (.) うん

(0.7)

B: [なんか

A: [それ友達にめっちゃうけてん

B: ほ: :

(.)

A: そう (0.2) 夜に (0.2) 出したやつが

(50) は平本 (2011) が示した、Bによる「なんか」とAによる発話の開始が重なって、Bの発話が脱落したデータである。この例において、「なんか」は平本 (2011) が述べているように、重複の解消装置としても働いている。この役割も一次的な手続きの意味から派生されたと考えられる。まず、どこかのレベルに不確定性があるというような方向に高次表意が作られ、会話を続けても正確な情報を得られる保証がないため、発話権を取っても構わないというように解釈される。談話の構造という観点から見ると、重複の解消装置のような役割を担っているのである。

次に、一つの話題がそろそろ終わる際に、新しい話題が提供される場面の例 (51) を見てみよう。

(51) A: …

(沈黙)

B: なんか、最近忙しいって聞いたんだけど。

(51) では、「なんか」を付けることで、聞き手は命題内容を得るのと同時に、伝達レベルに不確定性があるという方向に高次表意の構築が制約される。例えば、「勝手に話題を変えていいかどうかは迷っているが」のようなニュアンスが伝わることによって、話題の変更が話し手によって勝手に主導されているわけではなくて、聞き手の気持ちを配慮しながら発話されているという印象を聞き手は持つので、新しい話題の提示という談話的機能及び聞き手への配慮という対人的機能が派生的に生じると言えるだろう。

次に (52) を見てみよう。

(52) なんかイライラしてない？

(52) では、先行研究で挙げられた「聞き手配慮」という機能が働いていると考えられる。例えば、命題内容が聞き手に不愉快な気持ちをもたらす可能性があるということを考慮し、伝達すべきかどうかがよく分からないということを示唆する不確定性があることを示していると考えられる。「なんか」があることで、話し手は伝達に不確定性があるという方向に高次表意が構築されやすい。不確定性のない状態での「イライラしてない？」という指摘より、伝達に不確定性が含まれる「なんか」のある発話は、柔らかに伝わり、婉曲や聞き手配慮という機能を持つことになる。

以上の議論を要約すると、聞き手は「なんか」の手続き的意味に従い、意図された高次表意を構築すると、聞き手は情報に対する判断に一定の責任を持ち始めることになり、話し手の責任は軽減される。或は、「なんか」によって不確定性があることを話し手が明示的に示すと、聞き手の助け舟も随時受け入れられるようになり、沈黙の間を埋めるために使用することができる。また、複数の話し手によって同時に発話がなされた場合、「なんか」に続く発話は脱落しても大した影響を及ぼさないことを、他の発話の話し手は認識し、自分の発話をそのまま進めることができる。また、明示的に不確定性があるという心的態度を示すことによって、話し手が一方的に話題を主導しているのではなく、聞き手の気持ちも配慮しながらの話題変更という印象を聞き手に与えられる。最後に、明示的に不確定性があることを示すことによって、聞き手に反論する余地も与え、聞き手のフェイスへの侵害が小さくなり、発話がより丁寧に響く。このように、新しいトピックの開始を示す機能や、婉曲、聞き手配慮などの機能が生じるのである。言い換えると、先行研究で別々に記述された「なんか」の各種の機能は基本的な手続き的意味から推論を介して派生的に得られたものであると説明できる¹⁵⁾。

5 まとめ

本研究では、談話標識「なんか」に対して、これまで行われていなかった手続き的意味による分析を試みた。聞き手の立場を取り、発話解釈において、「なんか」がいったいどのような働きかけを行うかを説明した。つまり、「なんか」は、手続き的意味を持ち、話し手には発話が伝達されるまでのどこかのレベルに不確定性があるということを示す高次表意を構築するように聞き手の推論に制約を課すことで発話解釈を助けるものであることを主張した。また、不確定性のレベルを4つに発展させた。最後に、先行研究で別々に記述された談話標識「なんか」の各種の機能は「なんか」の手続き的意味から

- ▶ 15. 川上 (1992) は、「なんか」の基本的意味と談話における一部の機能を関係づけて説明しているが、話し手が「なんか」を「効果的に使っている」という観点からの説明であり、聞き手の推論の役割が考慮されていない。本稿では、聞き手の発話解釈の立場から、「なんか」の機能は、手続き的意味に基づいて構築された高次表意から推論を介して生じたものとして捉えている。また、これらの機能を派生させる推論は、基本的にGriceの協調の原理に基づいていると考えられる。Huang (2014: 35) によると、会話の格率に公然と違反することはできるが、協調的な話し手であれば、協調の原理を守っており、格率に違反することは、追加的なメッセージを伝達するためであると聞き手は推論する。「なんか」は、不確定性があることを明示的に示し、「質」の格率に違反していると考えられる。その違反が、さらに「発語内効力」を弱めたり、「FTAを緩和」したりすることになる。これは、ボライトネス理論が提案した「質問せよ、ヘッジを用いよ」というストラテジーの一部にもあたる (Brown & Levinson 1987: 199)。なお、関連性理論はGriceが主張した4つの格率を関連性という単一の特徴に集約しており、また、Jary (1998) などの関連性理論をボライトネスの説明に応用する研究があるため、上述の推論過程は関連性の原理の観点からさらに統一的に説明できる可能性がある。この推論過程についての詳細な分析は今後の課題とする。

派生的に得られる二次的な機能として統一的に説明できることを示唆した。しかし、「なんか」の二次的機能が派生される際の聞き手の推論過程についてのより詳細な説明、及び文末助詞が付いた形式（例：「なんかね」）や、パラ言語的要素が伴った場合についての考察は今後の課題とする。

謝辞

本稿は修士論文の一部を発展させたものである。研究の遂行と執筆にあたり、終始丁寧に指導して下さった指導教員の上田雅信先生に心から感謝致します。また、詳細にコメントをして下さった2名の査読の先生方にも心から感謝致します。本稿にある瑕疵は全て著者の責任です。

参考文献

- Blakemore, D. (1987) *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. (1996) Are apposition markers discourse markers? *Journal of linguistics* 32, pp.325-347.
- Blakemore, D. (2000) Indicators and procedures: nevertheless and but. *Journal of linguistics* 36 (3), pp.463-486.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press. [田中典子（監訳）齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子（訳）（2011）『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社]
- 林千賀（2006）「ディスコース・マーカー『なんか』の発達：意味の漂白化」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』1、pp.39-51。
- 東森勲・吉村あき子（2003）『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』研究社。
- 平本毅（2012）「発話ターン開始部に置かれる『なんか』の話者性の『弱さ』について」『社会言語科学』第14巻第1号、pp.198-209。
- Huang, Y. (2014) *Pragmatics*. Second edition. Oxford University Press.
- 飯尾牧子（2006）「短大生の話し言葉にみる談話標識『なんか』の一考察」『東洋女子短期大学紀要』38、pp.67-77。
- Jary, M. (1998) Relevance theory and the communication of politeness. *Journal of Pragmatics* 30, pp.1-19.
- 川上恭子（1991）「『何か』の不定対象と文形式」『園田語文』6、pp.101-121。
- 川上恭子（1992）「談話における『なんか』について」『園田国文』13、pp.73-82。
- 松尾文子・広瀬浩三・西川真由美（2015）『英語談話標識用法辞典：43の基本ディスコース・マーカー』、研究社。
- 森かおる（2012）「日本語会話における『なんか』の役割：ターン冒頭要素としての働きに注目して」『英語学英米文学論集（奈良女子大学英米文学会）』第38号、pp.25-41。
- 森川結花（1991）「不定表現について：『なんか』を中心に」『日本語・日本文化』（17）、pp.145-160。
- 西山佑司（1995）「『言外の意味』を捉える」『言語』第24巻、第4号、pp.30-39。
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D & D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. [内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子（訳）（1999）『関連性理論—伝達と認知』研究社]
- Sperber, D & D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Second edition. Oxford: Blackwell.
- 鈴木佳奈（2000）「会話における『なんか』の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』(9)、pp.63-78。
- 武内道子（2015）『手続き的意味論：談話連結語の意味論と語用論』ひつじ書房。

- 内田らら (2001) 「会話に見られる『なんか』と文法化：『前置き表現』の『なんか』は単なる口ぐせか？」『東京工芸大学紀要』24 (2)、pp.1-9。
- 内田聖二 (2011) 『語用論の射程：語から談話・テキストへ』研究社。
- 内田聖二 (2013) 『ことばを読む、心を読む：認知語用論入門』開拓社。
- Wharton, T. (2003) Interjections, language, and the 'showing/saying' continuum. *Pragmatics & Cognition* 11, pp.39-91.
- Wharton, T. (2009) *Pragmatics and non-verbal communication*. Cambridge: Cambridge University press.
- Wilson, D & D. Sperber (1993) Linguistic form and relevance. *Lingua* 90, pp.1-25.
- Wilson, D & D. Sperber (2004) Relevance Theory. In: Horn, Laurence R & Ward, Gregory (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, pp.607-632. Blackwell.

(平成28年10月24日受理、平成29年1月13日採択)

楊

雲
淇

YANG Wengqi